

## トップ対談

### 福島国際研究教育機構 (F-REI) の 役割と使命



### 地域の活性化、地域発展のための 東邦銀行の取組み

福島国際研究教育機構 理事長 山崎 光悦 氏

株式会社東邦銀行 取締役頭取 佐藤 稔 氏

モデレーター 一般財団法人とうほう地域総合研究所 理事長 矢吹 光一 氏  
株式会社東邦コンサルティングパートナーズ 代表取締役社長

(以下、敬称略)

**矢吹** 山崎理事長が理事長に就任された経緯、そして決意をお聞かせください。

**山崎** 金沢大学に奉職をして52年、この間、1年間の海外留学を除いては自宅のある富山県から大学まで通勤していました。農家の長男ということもあり、自宅から離れたことはありません。本当に「井の中の蛙（かわず）」。その「蛙」が福島県にお誘いをいただいて、本当に驚きました。復興庁の事務次官か

#### 山崎 光悦 氏 プロフィール

富山県小矢部市（津沢）出身  
昭和51年3月 金沢大学大学院工学研究科修士課程修了  
昭和57年12月 工学博士（大阪大学）  
平成6年7月 金沢大学工学部教授  
平成26年4月 金沢大学長  
令和4年4月 金沢大学特別顧問  
令和4年7月 復興庁参与  
令和5年4月 福島国際研究教育機構 初代理事長（現職）



福島国際研究教育機構 理事長  
やまざき こうえつ  
山崎 光悦 氏

ら熱心にお誘いいただきましたが、「福島県とはご縁がないので」と、お断り申し上げていたところ「一度、福島の現状をご覧になっていただけませんか。」とおっしゃるので何うことにしました。2泊3日で被災地を訪問し、帰還困難区域内の様子を見せていただきましたが、その光景の凄まじさに腰を抜かしました。復興まであと10年、20年はかかるような印象で、気が付けば私自身の残された人生と照らし合わせていました。これがきっかけとなり、程なくして最終的に理事長職をお受けすることにしました。復興庁の方々に「なぜ、私が選ばれたのでしょうか。」とお尋ねしました。金沢大学での改革の成果、そして、元々は「機械屋さん」ですので、ロボットやエネルギーの専門性、農業は自宅で少しやっている程度ですが、エフレイの研究の複数分野での専門性が好都合だったということでした。説得されて覚悟を決めた。覚悟を決めた以上は、責任を全うしたいと思います。



**矢吹** 福島国際研究教育機構（以下、F-REI（エフレイ））の役割、これから果たすべき使命について、お教えいただけますか。

**山崎** 我々、エフレイのミッションは4つに分かれます。この組織の1丁目1番地となる「研究開発」、2つめが「産業化」。「研究開発」の成果をしっかりと「産業化」に結びつけ、浜通りの活性化に貢献する。そして3つめは、「人材育成」。「研究開発」、「産業化」で成果を出しながら、地域の若い世代、起業家を育成する。私も含め役員が地域の大学、高専、高校で講義させていただいて、科学技術の面白さ、魅力を伝えるとともにそれぞれの立場でどのように将来を目指して、学ぶべきなのかを一緒に考えさせていただいています。そして、地域の次世代を担う経営者、技術責任者、若手の技術者を育てる。それが3つめのミッションです。最後4つめが政府の言葉を使えば、「司令塔」。震災からもうすぐ13年が経とうとしていますが、この間に国、自治体の研究機関が浜通り、中通り、会津に進出して、それぞれの観点から研究開発活動を行っています。

それらと連携し、効果を波及させるという役割になります。これが一番難しいミッションだと思っています。法律に基づいた協議会を立ち上げ、この協議会を通じてさまざまな機関と情報交換をさせていただいています。浜通りの街づくりに何が必要なのか、幸せな生活を送るための要素を見極めながら具体的な活動に落とし込んでいきたいと考えています。ミッションはこの4つになります。



「研究開発」は、5分野に分かれています。1つめは、「ロボット・ドローン」、2つめは、「農林水産業」、3つめは「エネルギー」、4つめは「放射線科学の医療や産業への活用」、5つめは、「原子力災害に関するデータや知見の発信」になります。



**矢吹** 地域のリーディングバンクとして、どのようにエフレイと関わり、地域の復興を担っていくかについてお聞かせください。

**佐藤** 日本をリードする研究機関であるエフレイの成果は、福島県の将来を左右すると言っても過言ではなく、地元金融機関として全面的にバックアップしていきたいと考えています。

山崎理事長も「日本一住みやすい研究の場を提供する。」とおっしゃっています。500名

の研究者の住環境も含めたインフラの整備では、資金的なお手伝い等を通じて、私どもも積極的に関わっていきたくて考えています。1日でも早く、地域に将来の姿が見えるようご支援できればと考えています。

また、当行の県内企業とのパイプを活用してエフレイの研究の成果を各企業に結びつけていかなければならないと考えています。企業からのニーズをキャッチしてエフレイにつなぐ、また、エフレイの取組みを企業へ発信するという役割です。

**矢吹** エフレイの公式資料を見ていると予算規模は、7年で1,000億円、今年度155億円と毎年約150億円となっています。これから、次々と研究施設や住居スペースが整備される中で地域の方々や事業者の方々へのご要望やご期待をお聞かせください。

**山崎** 1グループが平均10名で50の研究グループを形成し、500人の研究者、技術者においでいただくこととなります。加えて事務職員が150から200人を想定しておりますので、700人規模の組織となります。これが今後7年間の「組織形成」の目標となります。



研究に関係したところで地域の事業者をお願いしたいことと、環境整備という観点から地域や自治体の皆さんをお願いしたいことの2つに分けてお話をさせていただきます。

研究の中身で言いますと、研究成果が少しずつ見えてきたら浜通りを中心に福島県内で実証試験を行います。この実証試験を他の県で行っては意味がないと考えています。

実証試験は、地元の方のご協力が必要になります。例えばスマート農業であれば地元の方に圃場20、30枚をお借りするとか、ロボット・ドローンやエネルギーでもそれぞれのフィールドや施設をお借りしなければならない。さまざまな分野で地元の方のお力をお借りしながら一緒に取り組んで、その成果を分かち

合いたいと考えています。

環境整備の観点からは、700人規模の組織となりますので、やはり住環境の整備をお願いしたいと思います。関係自治体には、既にお願いをして準備を進めていただいております。

私は、研究者をどこか1カ所に集めるような「隔離村」を作るというような考えはありません。研究

者は、浪江町、双葉町、大熊町、南相馬市、富岡町等の居住区の中でコミュニティの一員として生活ができるようにしたいと考えています。日中は研究者として、家に帰ったらコミュニティの一員として生活する、これが大切なのではないかと思います。ただ、500人の研究者のうち3分の1は、外国籍の方をお呼びする予定としております。コミュニティも少しは英語が話せるとうれしい。若い方はすぐに話せるようになります。そういった交流やふれあいのある生活環境をつくることができたらと考えています。

それと「学校」、「病院」になります。家族で来られる研究者にとっては、いずれも大事になります。外国籍の研究者のためにもバイリンガル対応をお願いしたいなと思います。

「移動手段」については、電車の本数を増やして欲しいとか風に強い電車にして欲しいとか関係機関をお願いしています。それとは別に米国ヒューストンにあるような、その地域だけの乗り物とか、無人の乗り物があっても面白いと思っています。

地元の方々をお願いしたいのは、「みなさんと一緒に青写真をつくりませんか。」ということです。浪江町だけではなく、地域全体で作る。筑波研究学園都市に負けない、関西文化学術研究都市に負けない「学術研究開発未来都市」を一緒に描くことができると考えています。日本一住みやすいところをしたい。私が勝手に名付けた「常磐カリフォルニア」ができたらと思っています。

こうして、地域の方々や地元の企業とタッグを組んで研究成果を実証しながら最後は製品化して、その製品の製造や販売の権利は企業に所有してもらおう。地元の方とそういった協力関係、人間関係を構築したいと思っています。



**矢吹** 地域の活性化、地域発展のための東邦銀行の取組みをお聞かせください。

**佐藤** 福島県の人口減少という環境の中、産業構造や企業の在り方が変わらなければならないといった健全な危機感を持つべきだと考えています。そうした中で、当行グループとしてできることのひとつは「働く場を創出する」ことではないかと思います。企業のお手伝いをさせていただいて、その企業が成長することで雇用を確保、人口減少に歯止めをかける。そのような企業の成長のお役に立てるよう、コンサルティング業務を高めていこうと、東邦コンサルティングパートナーズを作り、とうほう地域総研の中でもコンサルティング業務を開始しております。手前みそながら、少しずつではありますが、力をつけてきているものと思っております。



ただ、一方でここ3年間、創業支援やベンチャー企業支援、上場に向けた支援に取り組んできましたが、結果として、そのような企業をたくさん支援できたのかというとまだまだ、力不

足を感じております。我々自身が、リスクを取ることに一歩踏み込めていないのかもしれませんが。チャレンジされる企業の背中を押し、新たな産業の創出を後押しするような踏み込んだ支援が必要であると感じています。

**矢吹** 地域金融に求めることを本音の部分でお聞かせいただけますでしょうか。

**山崎** 地域の企業を育て、その成果として特色ある産業が浜通りから福島県全体に波及する。そして、その地域の産業に携わる人と住む人がまちづくりに参加する。そうしたビジョンを描いた時に金融機関に期待したいことは、「金融業から『産業支援業』に変わりませんか。」ということです。エフレイには、先ほどご説明した5つの研究分野があります。例えば、水素については東邦銀行の〇〇さんに聞こうといった、専門家のいる銀行になって欲しいと思います。あの企業は良いシーズを持っているから融資したら儲かるかもしれないとか、そういったレベルの話ではなく、企業に最初から、ゼロベースで伴走支援するような仕組みをぜひ考えていただきたいなと思います。「そのやり方で銀行はどうやって儲けるか。」と聞かれそうですが、儲からなくて良いんです。地域が活性化すれば、人口が増え、勝手に地域経済は活発になります。銀行員でありながらロボット、ドローン、医療等それぞれの専門家でもある。銀行が生きる道、未来像はそこにあるのではないかと思います。ただ、そんな専門家を育てるにはそれぞれの学習が必要になります。若い人の背中を押し、時には、おしりを叩いてでもやってもらうためには、評価をしてあげることが必要です。頑張っている人とそうでない人の給料が一緒であって良いはずがない。しっかりと処遇しなければなりません。





東邦銀行（包括連携協力協定）

**矢吹** 今の山崎理事長からのお話を受けまして、東邦銀行グループの取組みについてお話をいただきたいと存じます。

**佐藤** これまでのやり方や考え方を踏襲すべきなのか、何ができていて何ができていないのか等一人一人が考え、意識を改革するよう行員には伝えています。例えば、本部が支店に仕事をさせるのではなく、現場である支店が動いてそれを本部がサポートする、そう考えるだけでも意識は相当違う。そうした、一つ一つが、全体へ波及し大きな変革に繋がっていくと考えています。金融サービスの枠を超えて地域社会に貢献する銀行でありたい、そう思っています。

**矢吹** 最後に若手行員に一言お願いします。

**山崎** 金融業から「産業支援業」であり「地域共創業」へと覚悟を持って変わりませんか。一緒に頑張りましょう。

**佐藤** 今までの銀行の考え方から一步踏み出す必要があります。若い皆さんが、自分の考えを思い切って発信して、上司が「面白い、やってみよう。」と言う。これが、変革には絶対的に必要なプロセスだと思います。当行は「共創」をキーワードとして掲げています。従業員の皆さんとそしてお客様と、そしてエフレイ様と新たな価値を創造していきましょう。

**矢吹** 今日は、研究者であり、教育者であり、経営者である山崎理事長の福島でのそして、エフレイでの「覚悟」をお聞かせいただきました。